

母校とは

校長 成田 忠雄

毎日毎日、通うの面倒くさいなあと思う。いっそ、学校の方から近づいて来てくれるといいのになどと考える。いつも学校の近くに住んでいる人はうらやましいなと思って。忘れ物したってすぐに家に戻るし、大きい方のトイレをしたくなかったって、家に帰って済ませられるし。放課後の校庭では誰かが遊んでいたから、遊び相手を見つけるのには事欠かなかった。野球やサッカーなど、暗くなるまで遊んでいられた。

これは昭和 40 年代に通っていた私の小学校時代のことを思い出してみたものです。木造の二階建て校舎で、階段も木製で、手すりがかすれすぎてつるつるしていました。トイレは今と違ってくみ取り方式で、それも男女一緒のトイレでした。目をつぶると今でも校舎の隅々まで思い出すことができます。

中学生になっても、担任の先生がまだいる間は、恥ずかしながら訪ねたことがありました。でも担任の先生がいなくなってしまうと、とたんに足が遠のいてしまいます。

高校生の頃に、古い校舎は取り壊され、鉄筋コンクリートの校舎になりました。普段は小学校の校舎なんて見向きもしないのに、取り壊されると聞いて、なんか自分たちの思い出までもが壊されるような気がして、とても淋しい気持ちになりました。新しい校舎ができてしまうと、とても縁遠い気がして、足を運ぶこともなくなりました。

それから何十年か経って、自分の子どもが小学生くらいになったとき、子どもを連れて母校に行ってみました。校庭で野球をしている子どもたちを見つけ、何気なく話しかけてみました。「今、学校でどんな遊びが流行っているの?」「給食はおいしいですか?」たぶん、変なおじさんだなと思われたかも知れません。でも遊んでいる子どもたちの姿を見ると、昔とそんなに変わらないなと思いました。そして、自分もこの卒業生なのだよと、つい自慢したくなるというか先輩風を吹かせたくなるというか。

この冬休みに、散歩がてらに立ち寄ってみました。自分が五年生の時に新築された体育館が最後まで残っていましたが、これも新しい立派な体育館になり、思い出にあったものは全くといっていいほどなくなってしまいました。あの校舎からいったい何人の卒業生を輩出したのでしょうか。

新聞を読んでいて、自分の母校の名前を見つけると、思わずじっくりと記事を読んでしまいます。賞をもらった子どもの一覧が学校名と一緒に記載されているのを見つけると、何となく誇りたいような気持ちになります。会った人がたまに同じ学校の卒業生だとわかると、その人にとっても親近感を覚えることもあります。たった六年間過ごしただけなのに、先生に叱られたこととか友だちとの懐かしいやりとりなど、いっぱい膨らんで、思い出ははち切れそうになっています。

誰にでも母校はあります。そして建物がなくなってしまっても、思い出の中には、いつも母校がひっそりと佇んでいるのです。いつでも帰っておいで。あなたたちの母校はいつもここにあるのだから。